



Runaway to midnight

北原 亜稀 人

Runaway to midnight

目の前の壁を越えるためには、やるしかない。そう決めた。勿論、決めるまでには時間がかかった。ぼくはどちらかと言うと慎重なのだ。

目標を定めるまでに約十日。手段選びに一週間。決行場所、時間の選定にも三日を費やした。合計二十日。しくじる理由なんか、もう何処にも見当たらない。ぼくは、壁を越えられる。

結果にはそこに至るまでの過程があり、始点には全ての根本として原因が君臨している。結果はまた一つの原因となり、過程となり、次なる結果目指して連鎖的に広がっていく。ぼくが今、巨大で冷酷な壁に直面しているのは、ひとつの結果だ。ぼくはこれを原因とし、次なる行動に出る。壁を打ち破り、これまで全てのくだらない結果達を笑い飛ばすために。敗北者候補でしかないぼくを、勝利者への道へと乗せる最初の起点とするために。自分が勝ったつもりでいる愚者を粛清し、真の敗北者が誰なのかを世に知らしめるために。勝つための方策は十分に施した。昔のぼくとは違う。今のぼくは、勝てる戦いしかしない。そのぼくが動くのだ。負ける理由なんか、何処にも無い。

*

「久しぶりじゃねえか、裕也……つっても、俺、お前のこと殆ど名前と呼んでなかったけどな」
笑いやがった。ぼくの目の前で。ぼくはいつでも行動に出られる。こいつはそのことを知らないから笑っていられる。愚者には、やはり粛清が必要なのだ。

昔通っていた中学の校庭、午後十一時。警備員なんかいないし、宿直の教師なんか殆ど仕事をしない。ちゃんと下見をした。何度か侵入した。何も起こらなかった。通報もされなかった。ここでなら何でも出来ると思った。それに、壁を越える最初の場所としてはこれ以上無いロケーションだったのだ。ぼくはこの場所で奴隷になった。そして、今日まで続くくだらない日々が始まったのだ。

*

ぼくは、奴隷だった。中学生になってすぐの頃から、県外の高校に行くまでの間、ずっとこいつを中心とするグループの奴隷だった。最初はごっこ遊びで、だんだん虐待。コーヒーを買いに行かされて、買って戻ると「やっぱりコーラ」と言われた。いなくなった、コーヒーを頭からかけられた。万引きごっこ、とやらでトップバッターを無理矢理に勤めさせられた。ぼくがこいつの指示通りにスニッカーズをポケットに入れたら、その瞬間こいつはぼくの腕を掴んで「万引き犯がいるぞ」と大声出しやがった。

奴隷。玩具。使い捨て。ヒューマノイドストレス発散機。たくさん、たくさん、くだらない呼称がついた。当時のぼくは、何処まで行っても、何をされても、何も出来なかった。しなかったんじゃない。出来なかったのだ。手段を知らなかったし、思考を筋道立ててまとめることも出来なかった。今は、違う。

「お前、根性あったからな。もし俺がお前の側だったらぜって一逃げてた」

「そんなことない……」

高校に入って、確かに奴隷ではなくなった。直接的にぼくのことをモノ扱いする人間はいなくなった。けれど、そんなの、救いでもなければ解放でもなかった。ぼくはもう、完璧に壊されていた。何も出来なくなっていた。何処かで誰かが見ているといつでも思っていた。何か一つでもしくじれば、終わり。ずっと、ずっとそう思って生きてきた。誰からも理解なんかされなかった。今だってそうだ。誰からも理解されない。許されない。認められない。社会はいつでもぼくを拒む。今年二十三歳だから、十周年だ。ぼくが世界から隔絶されて、十年。大学を出た。就職出来なかった。浪人した。何も変わらなかった。ぼくは今でもあの頃のまま、奴隷のままだ。

「大学出たんだろ、良いじゃねえか。俺なんか高校中退だぜ？」

「出たって、就職出来てないんだから変わらないよ」

「どっかで拾ってくれるだろ、お前真面目だし。根性もあって健康なんだろ？ 俺の真逆じゃん」

「ヨシザキくんだって、みんなの中心で、体育でも美術でもなんでも出来てたじゃないか……」

そうだろう？ 謙遜するなよ、ヨシザキショウゴ。お前は昔から何だって出来る、選ばれた人間だったじゃないか。

だから、唯一奴隷としてしか選ばれなかったぼくを、きちんとその支配下におさめていたじゃないか。昔みたいに、ぼくの心をへし折る力のある、最悪のツラを見せてみろ。そうすればすぐに終わらせてやるから。

「俺なんかもうどうしようもないんだぜ？ お前、HAMって知ってる？」

「……HAM？ ごめん、知らない、ごめん」

「HTMLV-1 関連脊髄症。まあ、そういう病気だよ」

「……………」

「さて、来年の俺は、再来年の俺はどうなってるでしょうって感じか。誰から感染したんだかも分からねえのがムカつくんだよな。変な女とやるなってことか？ メキシコ人とかよ。すげえ良い感じだったんだけどな。ふざけやがって」
再会してこちら、ヨシザキくんは笑えばなしだ。一つも、ただの一つも面白い話なんかしていないのに。HAM？ そんな話をしにわざわざ再会の約束を取り付けたわけじゃない。

「放っておくと歩けなくなる。その上、インポになるんだとよ。冗談じゃねえ。タネも残さず死ねるか」

「……治るの？」

「薬はあるけど、どうなんだろうな。副作用もガッツリあるし、その上、なんだっけ、タイショウリョウホウ？ そういうのだしな。まあ……インポにならなきゃいいや。あーもー、マジ、逃げてえ。何処にかは知らねえけど」

「大丈夫だよ。ヨシザキくん、強いから大丈夫だよ」

「で、何の用事なんだよ。急に会おうなんて。なんかの勧誘なら断るぞ？ 金ねえし」

「なんでもないんだ。ただ、どうしてるかなって思っただけだから」

冬のうちに決行しようと思ったのは、コートがあったほうが便利だったからだ。内ポケットにサバイバルナイフ。袖口には五十センチで切ったビニール紐。夏場ではこうはいかない。けれど、もうそんなもの必要なかった。

*

校庭にいつでも置き去りにされている朝礼台に並んで座って、ぼくは缶コーヒー、ヨシザキくんは、水。彼が言うには、これ以上変な化学物質を身体にいれたくねえ、らしい。彼が、わざわざ鞆に入れて持ってきてくれていた。

「お前がこんな何も無いところ指定するからよ……まあ、思い出っぼくて良いけど。覚えてるか、かくれんぼ。こんぐらいの時間で、十五人ぐらいでさ」

「隠れてたぼくを置き去りにして全員帰った」

「そうそう、だってお前、本気で見つからねえんだもん」

「季節も今ぐらいで、すごく寒かった」

「だから、普通の奴だったら馬鹿馬鹿しくなって帰るんだって。お前、根性あるんだよ。あん時、すげえ見直したもんお前のこと」

また笑いやがった。これじゃあ、何も終わらないじゃないか。

*

西に向けて走った。ずっと、ずっと、西。方角なんか確かめる必要もなかった。ずっと、ずっと西。夜の、一番深い方角だ。月が逃げて行く方角。ぼくも逃げる。走って、走って、逃げ続けた。止まりたくなかった。

何も変わらなかったし、何も終わらなかった。何も出来なかった。壁は今でも厳然として存在している。ぼくは今でも、あの頃のぼくのままだ。逃げたい？ ヨシザキショウゴ。お前は、ぼくに向かって「逃げたい」と言ったのか？

逃げたいのはぼくのほうだ。何処に逃げるのかなんてぼくも知らない。少しでも暗い方角、少しでも静かな場所。

走って、走って、限界を迎えて立ち止まる。冷たい空気が肺に痛かった。道端に倒れ込んで夜空を眺めた。澄んだ空気の遥か上、星たちが退屈そうにきらめいていた。月が静けさの海に身を横たえていた。夜中、誰も通らない道のまんなか。ぼくは、とても一人、だ。

「お前らに何がわかる」

声に出すと少し救われた気がした。

「お前らに！ 何が分かる！」

良いんだ、誰にも分かってもらえなくても。

*

やがて、朝に追いつかれた。夜は遠い地平の果てに去ろうとしていた。空の色が緩やかに混じり合っていく。深く暗いブルー、ぼくが追いかけて続けた暗がりの色、そして、広がる白。月はその姿を寝所へと隠し、冷気の向こう側から顔をのぞかせつつある太陽は、呆れた顔をしてぼくのことを眺めおろしている。

ぼくは、何も持っていない。そう思った。ぼくには何も出来ない。今回だって、二十日もかけてしくじった。ぼくは、何も持っていない。

明日、ぼくは何を手にするだろう。ふと、思った。

何を思う？ きっと、そんなに面白いことじゃない。

何処へ向かう？ その答えは簡単だ。何も無い此処から、何かがあるかもしれない何処かへ。太陽って奴は、朝って奴は、望んでもいないのに無理矢理ぼくを前に向かせる。お前らに、何が分かる。もう、大きな声を出す体力なんか何処にも残っていなかった。

あとがき 「此処から、何処かへ」

こうして `あとがき、の形で御目にかかるのは初めてですね。北原 亜稀人と申します。本作は、現在制作中の長編小説「Dear my friend」とリンクする、イントロダクション・ショートです。先行シングルカットのようなものとお考えいただければ幸いです。どのような形でリンクしていくのかは未だ非公開とさせていただきますが、読んで下さった方に「へえ……」と思っただけのような小品となるよう努力を重ねていく所存です。宜しければ、ご一読下さい。

2011年4月より、私、北原亜稀人は活動テーマを The GLORIOUS WORLDと定め、我々の生まれ落ちたこの偉大な素晴らしき世界を切り取る短編、長編を出来るだけ多くリリースして行きたいと考えております。勿論、私のような修行中の小僧が出来ることはたかが知れています。リリース、なんて偉そうに申しておりますが、実際のところは半ば以上が「配信」という形式によるものになるかと思えます。それでも書くのは、書きたいから。作りたいから。いつかは、これだけで食っていきたいから。そして、大切な人を守りたいから。ぼくが、ぼくであるために。

この場を借りて、気合い、入れます！

やるぜ专业化！ たとえこの身残念なことになろうとも！ 合言葉はNOT ENDED YET！

最後まで読んでくださってありがとうございます。北原 亜稀人でした。